



銀河学校を卒業して

1. 天文と物理

「銀河学校」(木曽観測所の観測天文学実習)に参加したのは、1998年3月、私は中学3年生になろうとしていた春先であった。その数年前から、天体望遠鏡で宇宙を眺めるなど、アマチュアの世界で天文を楽しんでいた私にとって、天文学者の世界は未知の世界であった。また、今では常識となったが、天文学者が望遠鏡を覗かない、観測は撮影が中心であることは驚きであった。今でも記憶を鮮明にしていることは、 $F=mv^2/r$ という遠心力の式である。銀河学校の授業で、天体の運行の説明に用いられた。当時、理科という形で科学を教えられ、物理という自然科学に触れる機会が少なかった私にとって、自然現象をこのような形で一般化できるということは、驚きであり感動であった。この瞬間から、宇宙物理という概念が私の中に形成され始めたように思う。

観測では、アマチュアの間でも普及し始めていた冷却 CCD カメラを用いての撮像を行った。このときの影響で高校入学時には冷却 CCD カメラを所有するようにはなったが、赤外線専用のカメラを使ったのは第1回銀河学校が唯一の経験である。NGC 2024 を赤外、及び可視光で撮影し、分子雲の向こうの恒星を観ようという内容だ。分子雲の向こうが見えるだけではない、天体像が可視光と全く違う。この経験も自分に大きな影響を与えた。第1

回銀河学校を卒業したこの年、よく分光器を作ったものだ。

その後、高校に入学、銀河学校の影響であろうか、物理は唯一の得意教科であった。

2. 2回目の参加

高校3年生になったばかりの4月上旬、第4回銀河学校に参加した。高校に入学して以来の2年間で、第1回に参加したときよりははるかに物理的知識を身につけていたため、観測・解析の内容をより深く理解でき、作業の一つ一つが非常におもしろく感じられた。このときは、天体の分光観測を行った。気柱管に高電圧を加えたものを分光したときに観られるようなスペクトルが、惑星状星雲の分光観測で得られ、物理法則が遙か彼方でも成立していることに感動したものだ。第1回銀河学校での分子雲の向こう側での天体の「存在の確認」という作業に対し、第4回では「何が起きているのか」というより踏み込んだ作業であった。

3. その後の自分、卒業生たち

このような経験に影響され物理系に進学した私だが、銀河学校が刺激になってその後の人生が変わったのは私だけではない。銀河学校卒業生の交流は非常に活発であり、銀河学校で「人生が変わった」学生の活躍ぶりが頻繁に知らされ、うれしい限りである。現在、大学に進学した銀河学校卒

業生は主に銀河学校1,2世代目にあたるが、当時の驚くほど高倍率であった作文選考を突破して入学できたほどの人材だけあって、非常にユニークな人材が多いように思える。彼らの活躍ぶりは、

そのユニーク性に銀河学校を加えた力であると私は確信している。是非、私も彼らに続きたいものである。

(米田瑞生)